

翻 訳

蘇智良著 『上海の慰安所施設

——「大一サロン」旧日本軍史上最初の慰安所の真相を暴く——』

斎 藤 敏 康訳

〈解題〉

このエッセイは上海師範大学・蘇智良教授がみずからの調査に基づいて発掘した上海の旧日本海軍慰安施設である「大一サロン」を紹介したブックレットの翻訳である。原題は『世上第一个日军慰安所揭秘』。2014年、中国慰安婦資料館・中国“慰安婦”問題研究センターによる印刷出版である。

蘇智良教授は1956年、上海生まれ。上海師範大学教授，中国“慰安婦”問題研究センター主任，上海師範大学都市文化研究センター副主任，上海師範大学人文とメディア学院院長などを兼任。専門は中国社会史。近現代が中心で上海近代史，上海閩社会史，中国毒物史などの研究がある。慰安婦問題に取り組むようになった端緒は東京大学に留学中であった1993年に，日本の研究者に日本軍の最初の慰安所が上海に設置されたことを指摘され，その事実を自分が知らなかったことにあるという。その後，精力的に上海および中国各地の慰安婦関連施設の調査，発掘に携わる。しかし日中関係や東アジアの政治情勢と深く関係するテーマであり，時々の政治社会情勢や中国政府の立場などにも影響されて，研究をめぐる環境は必ずしも良好であったわけではない。1999年にそれまでの研究をまとめて出版した著書『慰安婦研究』は自費出版を余儀なくされている。

私は2014年の夏に2度に渡って，上海師範大学に附置されている中国慰安婦資料館を訪問して，蘇智良先生をはじめとするセンターの人々や学生，ボランティアとして協力する市民たちの地道な活動に感銘をうけた。それとともに私自身もまた上海と中国における慰安婦の歴史について通り一遍の知識しか持ち合わせてこなかったことを痛感し，せめて中国でひとつの市民運動として慰安婦をめぐる歴史を発掘し記録しようとしている人々の成果の一端を日本に紹介しようと考えた。

日本では慰安婦問題は日韓史と日韓関係の脈絡でとらえられることが多い。しかし言うまでもなく「慰安婦」は日中史の重要なテーマでもある。蘇智良先生は15年戦争期に中国に存在した「慰安婦」は20万人を下らないと推計している。日中戦争の時間的長さや空間的広がりを考慮するとき，この数字は現実味を帯びてくるように思われる。

中国経済史と日中関係に関して多くのテーマを扱ってきた松野周治先生の退任記念号の一篇に蘇智良教授のテーマを加えていただき，併せて親しい同僚でもある松野さんへの感謝とさせていただきます。

目次

はじめに

- 一. 旧日本軍「慰安婦」制度の起源
- 二. 旧日本軍「慰安婦」制度の歴史
- 三. 「大一サロン」の開設
- 四. 「大一サロン」の運営と生活
- 五. 往時の回想から
- 六. 一枚の上海市街図と大一サロン
- 七. 保存が求められる大一サロン

はじめに

旧日本軍による最初の慰安所は東京に設けられたのでも横浜に設けられたのでもない。そもそも日本に設けられたのではなく上海に設けられている。意外なことに思われるが事実である。上海は旧日本軍の「慰安婦」制度発祥の地なのだ。

上海市虹口区東宝興路125・123弄（注）の「大一サロン」は日本海軍によって開設された特別慰安所のひとつで、1931年から45年の日本敗戦まで14年に渡って存在し、旧日本軍の慰安所としては最も長く運営された。

上海師範大学慰安婦資料館では20年来「大一サロン」施設跡とその歴史について調査を行い、多くの証人や物的証拠を掘り起こしてきた。さらに社会各界の努力もあり、現在では慰安所の旧跡が上海市文物保存委員会によって保存施設に指定されている。

現在のところ「大一サロン」が資料で確かめられるもっとも早期の慰安所であることはすでに学界でも国際的に認められており、私はこの施設を保存して「中国“慰安婦”記念館」を建てることを提唱している。

一. 旧日本軍「慰安婦」制度の起源

「慰安婦」ということばはもともと日本語である。いわゆる「慰安婦」とは、日本政府あるいは軍の命令によって強制的に旧日本軍将兵に性サービスの提供を強制され、性的な奴隷とされた、日本軍専属の性奴隷である。

1996年に国連の委託を受けて慰安婦問題を調査したフランスの法学者Radhika Coomaraswamyは、国際法に基づけば慰安婦は日本が戦争中に犯した組織的な強姦および性奴隷的な犯罪であると指摘している。私は慰安婦とは日本政府あるいは軍の命令によって日本軍のために強制的に性サービスを提供させられた性奴隷としての婦女子をさすと考えている。また慰安婦制度は日本政府が第二次大戦期に各国の婦女子を脅迫して日本軍兵士のための性奴隷として日本軍のために計画的に性奴隷を配置する制度であり、人道主義や性倫理に反し、また通常の戦争法規にも反する、日本のファシズム政府による反駁の余地のない犯罪行為である。

このような反人類的な制度はどのようにして生まれたのだろうか。

明治維新の後、日本資本主義は迅速に発展するとともに、徐々に軍国主義の道を拡張してきた。1918年7月、ソ連軍の東方への進出を阻むために英仏軍はムルマンスクに上陸して武力干渉を開始したが、日本もこの機に乗じて出兵して中国東北の北部および隣接するシベリヤ地域に勢力を伸ばした。日本軍は三年間に合わせて11個師団を投入して中国の東北地方とソ連に侵攻した。ソ連を侵略する過程で、日本の娼館経営者は軍部の特別の許可を得て、娼婦を連れて軍とともに行動して日本軍将兵に性サービスを提供した。だがそれにもかかわらず前線では日本軍将兵の強姦事件が頻発し、性病が流行することになった。日本軍医部門の統計によれば全体の10パーセントから20パーセントの将兵が性病に罹患し、その総数は一万二千人に達した。性病による減員は死傷した兵士よりもはるかに多かったのだ。性病の大流行は野心満々で世界戦争の道に向かっていた日本軍を震撼させた。これ以降、軍上層部は将来の戦争において性病による戦闘力の低下をいかにして防止するかの対策に腐心している。

日本海軍の『海軍軍医会雑誌』、陸軍の『軍医団雑誌』には専門論文が頻繁に発表されており、この問題について研究がすすめられていた。そして最後にとられた結論は、軍によってコントロールされ衛生的であることが保証された性サービス制度をつくることによって、日ごとに拡大しまた海外への派兵が増加する軍隊の性欲問題を解決すべきだということだった。

清朝末期以来、上海は日本海軍の海外における最大の基地になっていた。最も早い日本の上海駐留軍は1894年の日清戦争時に遡る。当時、日本の艦船は常時黄浦江に停泊しており、1897年に上海の人力車夫が共同租界で増税に抗議するデモを行った際に、艦船・大島の二十名の兵士が上陸して日本の上海総領事館を守備した。これが日本軍の上海派遣駐留地上部隊の始まりである。

1904年の日露戦争では、上海の租界は中立を宣言していたにもかかわらず、日本海軍は軍艦秋津舟を派遣して黄浦江に停泊させ、一ヶ月にわたってロシア艦隊の監視を続けた。1905年に役所の合同審判騒ぎが起こった時は日本艦船・対馬の陸戦隊が上陸し、虹口の東本願寺に守備警察隊本部を設けた。また同年、日本海軍は南清地域警備艦隊を編成し、1909年にはこれを第三艦隊と改名して上海を停泊地とした。海軍陸戦隊司令部が虹口北四川路（現在の四川北路）東江湾1号に置かれ、あわせて貝開児路53号（現在の愚民路・保定路の交差点、後に現在の四川北路・東江湾路・多倫路の三本の通りが交差する地点に移動する）には上海日本海軍俱樂部が設けられた。1914年のことである。

1928年4月には済南事変が勃発して、上海や中国各地で抗日の機運が高まったが、日本は5月に大艦隊を上海に増派するとともに多数の海軍陸戦隊を上陸させた。上陸した日本軍は北四川路でしばしば上海市民との間で衝突事件を起こし、加えて市西部、北部一帯では偵察活動を行っていた。日本が上海に駐留させた海軍陸戦隊の兵員は通常二千人から三千人であったが、日中情勢が厳しくなると二倍に増員された。たとえば31年「九一八事変」（満洲事変）後には、海軍は上海に大幅に増派し、32年1月にはついに「一二八事変」（第一次上海事変）を起こした。

兵士の性的な欲求を満たし、いわゆる安全な性サービスを提供するために、1932年1月陸戦部隊司令部は、日本人が上海虹口地区に開設し営業していた「大一サロン」など四軒の風俗店を選んで海軍指定の慰安所とした。これが日本軍による国内外で初めての慰安所である。

二. 旧日本軍「慰安婦」制度の歴史

日本軍の慰安婦制度は発生から発展そして消滅の過程をへている。

その第一段階は、1932年1月から37年7月、日本軍の慰安所が上海や東北（満洲）等の地方に出現した時期である。

1931年1月、日本海軍陸戦隊司令部は虹口の「大一サロン」（宝山路）「小松亭」（虬江路大富里5号）「永楽館」（狄思威路、現在の溧陽路）「三好館」（呉淞路松柏路）という日本人が経営する四軒の風俗店を海軍指定の慰安所とした。

1932年1月28日には日本が起こした「一二八（事変）」により淞滬戦役が勃発した。日本海軍陸戦隊は上海を守備していた国民党第十九路軍に向かって進攻したが、十九路軍の頑強な抵抗に遭った。中国国民政府軍はその後、張治中將軍の率いる第五軍を派遣して第十九路軍と共同して上海の防衛にあたった。これに対して日本政府も絶え間なく上海に援軍を増派した結果、3月までには上海における陸軍部隊は三万人を超えた。

大規模な強姦事件が軍紀の弛緩と性病の氾濫につながることを防ぐために、上海派遣軍の岡村寧次副参謀長は上海における海軍のやりかたにならって、日本の関西地方において一回目の陸軍「慰安婦団」を募集し、呉淞、宝山、廟行および真如などの戦闘の前線に日本軍将兵に性サービスを提供する慰安所を設けた。この「慰安婦団」募集こそ、陸軍が初めて組織的に「慰安婦」制度の設立に関与した行為であった。これは後の日本軍の戦時における「慰安婦」制度の重要な起点であるとともにモデルにもなった。

これ以降、上海では日本人および韓国人が経営する慰安所が続々と生まれた。日本軍が中国東北部（満洲）を占領してからは、黒龍江、吉林、遼寧の各省でも一連の慰安所が設けられた。

「慰安婦」制度発展の第二段階は1937年7月から41年12月にいたる時期である。日本軍による慰安所はこの時期に中国各地の占領地に全面的に拡大された。

日本軍が「慰安婦」制度を全面的に整備していった根本的な原因は戦略戦争の全国的な展開であり、南京大虐殺はその重要な契機であった。日本は1937年に前後して盧溝橋事件（37年7月7日）と第二次上海事件（37年8月13日）を起こして全面的な中国侵略戦争を始めた。その年の12月に日本軍は南京に侵攻し、人類史上まれにみる虐殺暴行をくりひろげた。おびたしい無辜の婦女が強姦・殺害され、年老いた老婆から幼い少女にいたるまで難をまぬがれることはできなかった。第二次大戦後、東京国際法廷は「占領後の一ヵ月に南京市内で二万件前後の強姦事件が発生した」と認定している。日本軍は二つの問題に遭遇していた。ひとつは国際社会における世論の譴責がいよいよ強まったことであり、いまひとつは日本軍将兵のあいだに性病が発生し、日を追って重大になっていったことである。そこで軍上層部は「慰安婦」制度の迅速な実施をはかり、上海、南京などの慰安所建設が急遽日程にあげられた。

上海市楊家宅の慰安所は日本の上海派遣軍が直接設けた大規模な慰安所であり、「慰安婦」は百人以上に達していたことが、私たちの調査によって確認されている。南京もまた日本軍によって設置された慰安所が相当多数に上った都市で、少なくとも五十カ所が存在した。私たちは2004

年に北朝鮮の平壤から被害者のひとりである朴永心さんを南京に招いて、朴さんが当時被害をうけた場所である利済港慰安所を確認した。

「慰安婦」制度の第三段階は1941年12月から45年8月である。この時期、日本軍の慰安所は東南アジア各地に拡大されたが、最後には日本の敗戦とともに慰安所もすべて消滅した。

戦争の拡大にしたがって慰安所もまた広範な中国各地に設置されていった。非占領地である甘肅、陝西、チベット、新疆、寧夏、青海などを除いて、黒龍江、吉林、遼寧、内蒙古、山西、河北、河南、北京、天津、山東、江蘇、安徽、江西、上海、浙江、福建、湖南、広東、広西、海南、貴州、雲南などの省都からはいずれも大量の慰安所遺跡が発見されている。

1941年12月、太平洋戦争が勃発して以降、日本軍の占領地域の拡大にともなって、慰安所の設置範囲もまた中国大陸の戦場から香港、台湾、マレーシア（シンガポール、東ティモールを含む）ビルマ、インドネシア、フィリピン、ベトナム、東インド諸島、太平洋東部諸島、日本などの地に拡大した。この時期の日本軍「慰安婦」は中国、朝鮮および日本本土から強制的に連れてこられた性奴隷のほかに、東南アジア現地の婦女が含まれており、さらには東南アジア各地の西欧人女性も難をまぬがれることはできなかった。

台湾では慰安所の設置が、北は艋舺、西門町、北投を中心とする地区に集中し、南は台南新町に存在した。当時、台南の小梅園慰安所は「神風特攻隊」が出撃する前に歓を求める所であった。嘉儀朴子東亜楼も日本軍慰安所に指定されていた。1944年に戦局が激化して以降は台湾各地で日本軍の特攻隊が組織され、それぞれ慰安所もつくられた。文献・資料によれば、日本軍が台湾で「慰安婦」を募集する方法は主として仲買人などを通じて「看護師担当」「賄いに従事」といった名目で誘い込み、騙された女性たちを日本軍の性奴隷にした。台湾研究者の初歩的な推計によれば台湾「慰安婦」の被害者は千二百人以上に上るといふ。

三. 「大一サロン」の開設

大一サロン（大一沙龍）は初期には「大一」と呼ばれていたものだが、上海在住の日本人が開設した比較的早期の日本的な「貸座敷」であった。いわゆる「貸座敷」とは一種の日本的な風俗営業店であって、客に食事飲料を提供するほかに女性を慰みものとして供してもいた。接待される客の国籍は問わないことになっていたが実際には日本人が主であり、日本軍将兵も普通の日本人もいた。「大一」という名称は1920年の『上海日本人名録』に記載があり、初期には日本人の白川氏が経営していた。場所は宝山路であったが、この宝山路は閘北地区の共同租界との境界道路区域にあっていた。

日本領事館の1920年から23年の調査によれば、「貸座敷」を営む日本人経営者は共同租界当局による廢娼運動を避けるために境界道路区域で開業していた。しかし1927年に南京国民政府が成立してからは中国人居住地区でも禁娼が行われるようになった。上海特別市政府は1929年6月に公娼廢止を公表して、妓楼の公然経営は不許可とし、さらに1930年3月20日には日本総領事館に照会して、日本人が経営している中国人街の「大一」「三好館」と「小松」など四カ所の売淫所は正業に転じるか閘北を離れて共同租界に移ることを求めた。そこで日本側はやむなく翌年11月

25日に「貸座敷」として営業していた「乙種芸妓」を「酌婦」と改めたが、依然として「貸座敷」が引き続き存在することを認めていた。しかしその後、日本人経営者が開設経営していた風俗業店は次第に虹口地区に移動した。「大一」の経営者はこの時期に白川氏から近藤ミツ氏に代わっていた。

「大一サロン」などの日本の「貸座敷」で働いていた婦女子の数については今のところまだ正確な人数を把握できておらず、娼妓の人数の変化をいくらか知りうるのみである。日本の『昭和五年上海総領事館警察事務状況』の記録によれば日本人が経営する「大一」を含む四軒の「貸座敷」は、1928年には合せて32人の酌婦がいたが、1930年には19人に減っている。駐上海日本総領事館警察署の同じ資料統計によると1930年上海の芸妓および接客にたずさわるその他の婦女は合せて1290人、その内「甲種芸妓」173人、「乙種芸妓」（娼妓）19人、旅館、料理屋、貸席、飲食店419人、ダンサー164人、「洋妾」159人、私娼346人である。

清朝末期の虹口は広東籍の人々が多く居住する地域であった。東宝興路125弄1号の主人も広東からやってきた移民であり、その祖先はかつてオーストラリアのシドニーなどで果物を販売していたが後に上海に移ってきた。1号の家屋は1920年代初期に建てられたが、ここは潮汕（広東省潮州）同郷商人の集会所であった。柳条湖事変を控えて上海の情勢は次第に緊迫の度をつよめ、日本海軍陸戦隊は武威を発揚し、これを後ろ盾にして大陸浪人たちが中国人に対する挑発事件を頻繁に起こすなど傲慢な態度を増長させていた。そのため虹口に住んでいた広東商人たちは次々と離れていったが、近藤ミツ夫婦はこの状況を利用して東宝興路125弄1号を確保し、日本海軍の後援をえて「大一」の経営を続けるとともに名称を「大一サロン」と改めた。

1931年11月、「大一サロン」は日本海軍陸戦隊司令部が承認する慰安所第一号となった。私たちの調査によれば、ここは普段は看板も掛けておらず慰安所という呼び名もなかった。はじめは日本海軍軍人を接待するだけでなく、日本人居留民をも接待していた。また検査制度も何もなくなかった。この時期の「慰安婦」は日本人であれ、また朝鮮人であれ基本的にはみな娼妓であり、これらの女性たちはすべて貧困な山地などで募集された若い女子であった。

上海の日本海軍陸戦隊は、1931年末には常時4千人前後に達しており、大一サロンは海軍指定の慰安所として拡張を続けた。こうした状況は日本外務省の档案資料によっても実証されていて、日本が上海に設けた海軍慰安所について32年初めの記録が残っている。1932年第一次上海事変が起こると日本は続々と上海に増派し、そのため上海で開業する海軍慰安所も十七カ所に増えた。これらの慰安所は日本海軍の将兵を客としたが、32年末には十七個所の慰安所で合せて芸妓275人、慰安婦163人がいた。

大一サロンを含むもっぱら海軍将兵を接待する慰安所は30年代の中ごろにはすでに厳格な検査制度を実施していた。駐上海総領事館は海軍陸戦隊とともに大一サロンの婦女に毎週2回身体検査をおこない、性病罹患患者には客を接待させなかった。

『日本人在華人名録』（1942年、33版）の記載によれば大一サロンの経営区分は「咖啡貸席業」であり、経営者は東京から来た近藤美津子、東宝興路125号の電話番号は46940または02-62801であった。

四. 「大一サロン」の運営と生活

居住者の回想によれば東宝興路125弄1号の表門はもともと中央正面に開かれていたというが、現在は改修されて西側にある。表門を入って行くと庭園があって、面積は広いとは言えないが日本的な風格を今でも認めることができる。私は日本人が戦時中に印刷した『支那在留邦人人名録』を手許に持っているが、そこに大一サロンの広告が載っており、誌面の上部半分に大一サロンの庭園が写っている。60年を経て庭園の趣はすでに大きく異なっているが、境界をセメントで区切られた花壇は今も存在しており、モザイク模様の装飾タイルの大部分もまだそのままだ。

中庭にはいまも一年四季変わることなく緑をとどめる松柏科に属すると思われる樹木が一本ある。居住者たちは当時からこの木は中国産ではなく日本から移植したものに違いないと思っていたが、今でもそのように考えられているという。

125弄1号は2階建て木造煉瓦構造でかなり装飾性のつよい建物である。当初、大一サロンの日本人慰安婦はわずか7人前後に過ぎなかったが、地理的に北四川路（現在の四川北路）に近く日本海軍陸戦隊が集中しており司令部は東江湾路と北四川路の交差点にあった。またそこから南側のほど遠くない所（現在の海能路）には日本陸軍上海武官室があった。したがって海軍陸戦隊隊員の予約が相次ぎ商売は十分に繁盛していた。そこで経営者夫婦は日本国内からさらに20名の少女を募集して、1号の後ろにあった二棟の中国人居住住宅（現在の125弄2号3号）を併合し、これも西洋式木造煉瓦構造の建物にした。経営者はさらに客を送迎するための車両を配置し、道路向かい側にガレージを設けて（宝興路120,122,124号、1977年に取り壊された）結局大規模な慰安施設を造り上げた。

私は1994年に陸明昌という87歳になる老人を捜すことができたが、陸明昌老人は非常に重要な証人であった。東宝興路108号に住むある老人の紹介によれば、陸明昌さんの原籍は江蘇省南通であるが、「一・二八事変」（第一次上海事変）の前後に故郷を離れて上海で暮らし始め、人の紹介で大一サロンの雑務係になった。

初期の大一サロンの客には日本海軍の将兵以外に一般の日本人もいたことを陸明昌さんははっきりと覚えていた。表門を入ったところが日本式の中庭になっていて、石段を上ると奥には大きなバー・カウンターがあり、普段から酒を供しダンスをして客を接待した。両側に立つ棟の二階と後ろの3棟はすべて日本人慰安婦の部屋だった。建物の東側に花壇があり真ん中には噴水池があった。周囲の空き地には屋外ダンス・ステージがあり、そこで毎晩歌と踊りの宴が催され、夕方の7時を過ぎると賑やかさが増していった。「八・一三事変」（第二次上海事変）が勃発してからは戦闘で大一サロンの建物も被害に遭った。それで1937年末、事変が終結するとすぐに経営者の近藤美津子は改修を行った。大一サロンはそれ以降完全に日本海軍将兵専用の慰安所になって、普通の日本人は入れなくなった。和服を着た慰安婦たちはみな貧しい日本の山村からやってきた少女だった。後には朝鮮の少女もやってきた。135弄1号の1階4号室で日本の医師が毎週慰安婦の検査をした。経営状況は非常に良かったから、後に主人の近藤氏がひと財産を携えて東京に帰ると、それからは近藤氏の奥さんが一人で大一サロンを切り盛りしていたが、1944年頃にその

奥さんも亡くなった。この奥さんが近藤美津子である。その後は息子が経営を引き継いで終戦を迎えることになる。

五. 往時の回想から

陸明昌さんは大一サロンでは食事作りの他にバー・カウンターのかたづけやビールの運搬などもやっており、ちょっとした用事はすべて陸さんがこなしていた。陸明昌さんは大一サロン慰安所で働くこと14年に及んだ。日本軍の慰安所において世界で最も長く働いた人物といえるだろう。毎日、日本人と言葉を交わしていたので、ついにはある程度の日本語が話せるようになった。毎月の給料はわずかに6銀元、その上いつも日本人に叩かれたり怒鳴られたりして辛かった昔のことを思い出すと今でも怒りが込み上げてくるという。1999年、陸明昌は長く患っていた中風のために亡くなった。

陸明昌さんら当時の状況を知る人々の回想によると、戦争の中期、後期には大一サロンで少なからぬ中国人女性が日本軍のために働かされていたといわれる。

1994年、私は大一サロンの付近に住んでいた当時71歳になる林鈴娣（1924年生まれ）を知った。林鈴娣さんの家は桶を作る桶屋だった。林さんは大一サロンについて明晰に記憶していた。

「私の父は桶屋でした。大一サロンを私たちは“大一記（Da yi ji）”と呼んでいました。経営者である夫人がよく私の家に小さなお盆を注文しに来たのです。そのお盆は慰安婦と客が風呂に入るとき手拭いや石鹸を置くためのものでした。一回の注文は全部でお盆10枚、1枚1円（日本円）でした。その頃私は10歳あまりで、そのお盆はいつも私が届けに行っていたのです。でも入り口の所で渡すだけで中には入れてもらえませんでした。中の女性たちはみな和服を着て下駄をはいていました。内部の具体的な状況は、私は見る事ができませんでした。向かいにある二軒の建物は車を停めるための場所でした。戦争が終わった時は日本人が可哀想でした。」

林鈴娣さんは、大一サロン周辺の中国人は「大一記」と呼んだと言う。この「大一記（Di yi ji）」は日本語の「大一（Dai I ti ダイイチ）」の音訳ではないかと思われる。

林鈴娣さんの家は東宝興路113号で、大一サロンのちょうど東側である。彼女の夫の五金鑫（1994年73歳、1922年生まれ、江蘇省啓東出身）は師匠でもある林鈴娣さんの父親について桶造りを学び、修業が満期になった後も師匠の下で仕事をした。師匠は娘を五金鑫さんに嫁がせた。上海でいう「入り婿（招女婿）」である。王金鑫師匠は、言葉数は多くないが記憶によれば「大一サロン」では小さな盆のほかに大きな木桶を求めていて、王さんも時々こうした人ひとりが入って体を洗うことができるような大きな木桶を造ったという。

大一サロンは後に規模が大きくなっていった。現在の125弄2,3号も二階建て西洋建築であるが、東側にはさらにそれとは異なる風情の二棟の二階建ての建物（現在の東宝興路123号）があった。日本海軍と経営者は共同で内部の改造をおこなった。東宝興路101号6弄に住む陳阿金老人は2001年で82歳であるが、若いころ大工をしていた。陳阿金さんは師匠について大一サロンに入って仕事をしたという。おもに木板で部屋を区切り、日本式の襖と窓を造り、畳を敷いた。五軒の家屋の二階はすべて通路でつながっていて便利であった。これらの二階通路も陳さんと師匠が造

った。

慰安所には朝鮮、日本、台湾それに中国大陸の慰安婦がいた。陳さんと師匠の毎日の工賃は25銭（日本円）だったという。大一サロンの設備は当時としては非常によく、ガスや水洗トイレがあったことを覚えている。惜しいことには戦争が終わったときに、かなり日本人に壊されてしまった。会計係の男性は日本人でかなり太っていた。陳さんは事務室に高麗人の女性がいたことを覚えている。「私がなぜそれを知ったかという、戦争が終わった後に高麗人の女性がはいっていた靴下が日本人のものと違っていたからです。大一サロンには守衛がいて、夜になると門が閉じられました。おそらく女の子たちが逃げ出すのを防ぐためであったでしょう。現在の四川北路のクラブも当時はやはり慰安所で、「月光」と呼ばれていました。まちがいありません」

張銀富は103号に住んでいる。2001年当時72歳。ここで生まれ、幼いころは東宝興路で過ごした。だから当時の慰安所についてかなり明晰な記憶をもっている。張銀富さんは、もともと大一サロンの東側には一軒のとても高級な二階建ての建物があったが、八・一三（第二次上海事変）に日本人が上海に侵攻してきたときに爆撃をうけて壊されてしまい、その後につくられた建物はとりたてて特徴のない普通のものだったという。大一サロンの日本人の周囲で使っていた中国人にたいする待遇はまあまあだったが、店主を補佐して管理を仕事にしている高麗人は非常に悪くて、いつも中国人をガミガミと怒鳴り殴っていた。

1945年8月に上海が光復してから、この場所は敵資産として国民党空軍によって接收され、国民党の軍政要員が住みはじめた。49年解放後、国民党の家屋財産は解放軍の管理に委ねられることになり、軍の革靴工場の労働者に分配された。現在、そこには元解放軍3516工場の家族が住んでいるが、大部分はすでに退職している。

余談だが、張銀富老人の師匠が偶然にも林鈴娣さんの夫であったために林鈴娣さんは張銀富さんの師匠の奥さんにあっていた。2002年に私は二回目に東宝興路を調査したとき再び張銀富さんに会った。熱心に協力してくれた張老人は、私のために長く会っていなかった林鈴娣さんと呼んでくれた。林おばあさんも勿論私を覚えてくれていた。前回の調査で林おばあさんに会ったのは1994年、71歳にときであったので、2002年にはすでに79歳になっていた。

1924年生まれの龔榮華さんは123弄7号に住んでいた。龔さんは1937年、14歳の時に軍隊に引張られて炊事兵にさせられ、その後、日本敗戦までの14カ月間日本軍のために食事をつくった経験がある。龔榮華さんは、大一サロンの門にはもともと大きな鉄扉があったのだが、1958年の大躍進時代の民間での溶鉱炉建設大運動の時に取り壊されたという。

125弄2号は後に慰安所の一部になり、現在も日本式の襖や窓などいくらかの遺物が保存されている。さらに隣室の呉家には慰安所時代の本彫が二幅保存されている。一幅は富士山で、もう一幅は、心得のある日本人の考証によれば、おそらく琵琶湖であろうと思われるが、彫刻はかなり精緻である。私も日本の景勝地で類似の製品を目にしたことがある。おそらく日本から上海に運んできたものであろう。呉家の主人は呉讓三氏、1945年からここに住みはじめた。当時ここには中国銀行の職員宿舎であり、呉讓三もまた中国銀行に勤めていたのである。呉さんは45年からずっとここに住みつづけ、2002年で87歳になっていた。

125弄1号の一階に住んでいたのは何懐啓さんだ。人民解放軍3516工場の退職幹部で1933年生まれ。1955年にこの家を分配されて住みはじめた。何懐啓さんによれば、東宝興路は（元来は弾

夾路で)、大一サロンの家屋の外面にもいくらか変化がある。家と家をつないでいた二階の渡り廊下もすべて壊された。私たちが住みはじめたころ部屋の床はすべて畳だったと言う。何懐啓さんは参観者や調査者がやってくると煩を厭わず説明に努めてくれた。「私が住んだ1号の一階ホールは、元は日本軍のダンスホールでした。建物のそれぞれの部屋はとても広くて、引っ越してきたときに部屋にはまだ日本式の畳が敷かれ、引き戸がありました。後に一階に住む所帯が多くなり、その都度改修を重ねたために元は続いていた幾間かの部屋も隔てられてしまったのです」。何懐啓さんはまだそれほどの高齢ではなかったが、残念ながら2006年5月6日に病気で亡くなった。

125弄1号の二階に住む鄭大好は1号で存命している古い住民である。20世紀の50年代はじめに山東省からやってきた鄭大好さんは人民解放軍・空軍の夫とともに125弄1号に入居した。当時、二人に分配されたのは二階のすべての部屋であった。そのころは1号から3号まですべて通路でつながって通じていたが、たっぷり半世紀が過ぎて夫は世を去り、息子や娘は引っ越して行って、鄭大好おばあさん一人の静かな暮らしがはじまっている。幸い1号の隣人たちは脚の不自由な鄭おばあさんの面倒をよくみてくれており、階下のおじさん、おばさんたちがいつも買い物のついでに、毎日の惣菜をはこんでくれる。鄭おばあさんも彼らが住居する以前の建物の歴史をよく知っていて、来客があると熱心に案内してくれるのだが、鄭おばあさんの家の日本式の引き戸はすでに非常に古くなっていることがみてとれる。

日本の老兵の中にも実は大一サロンを記憶している人物がいる。

1998年の冬、私は日本の友人で慰安婦問題の専門家である西野留美子氏にとまなわれて東久留米市に在住の、上海慰安所について非常に詳しい老兵・近藤氏を訪ねた。西野氏と私は近藤氏と駅の近くの喫茶店で会う約束をして先に行って待っていると、約束の時間にほぼ70歳あまりのすこぶる壮健な老人が入ってきた。はじめ私たちは日本語で話を始めたのだが、老人は私が上海から来たことを知ると、口調を改めて「あんたは上海人かね？」と混じり気のない上海語を話し始めて私を驚かせた。しかも細かく観察すると近藤さんの語りや挙措はまったく上海人と同じだった。それもそのはず、近藤さんはもともと上海の日本人の家庭に生まれ、子どものころから上海の路地裏(弄堂里)で育ったのであった。上海語も母語と同じように、あるいは日本語よりも上手に話すのである。戦争の時代、近藤さんは軍隊に入り第13軍、別称・登部隊の通信兵になったのだが、第13軍司令部は江湾五角場に設けられていた。

近藤さんは戦争のころ少なからぬ慰安所に行ったことを認めた。現在は時が移ろい事情も変わって、大一サロンについてもはっきりした記憶はなくなってしまったが、しかしたぶん行ったことがあるかもしれないと述べた。近藤さんは戦後そのまま上海にとどまり、上海の女性労働者と結婚して家庭をもった。60歳で上海の紡績工場を退職した時にはじめて故郷である久留米市に帰ってきたのである。

東宝興路の老人たちはみなある光景を覚えている。おおよそ1990年代の中ごろの冬のある穏やかな日のある一日、朝鮮衣裳を身につけた老婦人が125弄1号の入り口にたたずんでしきりに涙を流しながら、長いあいだ立ち去りがたくしていた。言葉が通じないので事情を知るすべはなかったが、老婦人はきっと当時の大一サロンの生き残りの人であろうと推測されたという。

戦争が終わってからすでに60年余りが経過し、より多くの生存者や目撃証人を捜す方途も乏し

くなっているが、これまで紹介してきた証人たちの回想からも簡単かつ明確にひとつの歴史的事実を構成することができる。

大一サロンは他の多くの慰安所と同様であって、そこにおける慰安婦は人身の自由を失った戦争被害者である。とくに陸明昌さんの回想は重要である。陸さんはある事実、すなわち中国人慰安婦は強制されていたのであり、夜になると慰安所の門を閉めてしまうのは、女性たちが逃亡することを防ぐためであることを語った。また張銀富さんは回想で、管理者たちがしばしば中国人女性を怒鳴り、殴打していたと述べている。これは上海およびアジア各地の多くの慰安所で見られた光景であったのだ。

六. 一枚の上海市街図と大一サロン

2007年7月5日、上海師範大学に設置された「慰安婦資料館」が開館した。三日間、毎日三百人をこえる参観者が資料館を訪れた。2007年の7月7日はあたかも「7・7事変」（盧溝橋事変）70周年にあたっていたため、「新民晩報」の方敏強記者が上海師範大学に取材に訪れた。方敏強氏は記者であるだけでなく、多くの収蔵品を取集している文物愛好家でもある。私が、上海で日本軍が実施した慰安婦制度の重要な位置づけについて語り、当然、世界で初めての慰安所である大一サロンにふれたところ、方記者は、日本軍の軍用地図を少なからず持っているの、その中に慰安所の記録が残されているかもしれないと言った。そこで私は方さんに時間のある時にぜひこの歴史的証拠を調べて欲しいとお願いした。

方さんは帰宅後、夜を徹して箱を引っくり返し所蔵している地図を調べ、中から日本軍による中国侵略時代に印刷された、まさしく当時の年代に属する多くの地図を見つけた。それから虫めがねで慰安所の場所と名前を丹念に探しはじめた。すると、努力は人を裏切らないというか、方記者は最後に一枚の地図の上に「大一」の文字を捜し当てたのである。

翌7月8日午後、方敏強記者は再び慰安婦資料館を訪れて、私に一枚の地図を示した。子細に観察しながら私は驚きかつ喜んだのだったが、それは日本の年号で昭和12年とあった。すなわちこの地図は1937年8月15日に東京で印刷され、8月20日に発行された「上海市街図」なのである。縮尺は二万分の一であった。「大日本帝国陸地測量部」製図と記してあるけれども、この「上海市街図」は私の見るところ上海派遣軍の装備の一部として急いで印刷されたものではないかと思われる。それは8月13日に日本政府が陸軍から成る上海派遣軍を増援する決定を行い、急遽準備を上げた後、この支援部隊は8月22日の深夜に呉淞口に到着しているからである。

地図には「大一慰安所」の位置がはっきりと示してある。あるいはまた地図の製作者は日本軍部で、以前から大一サロンという海軍特別慰安所の位置や様子を知悉していて、あえて陸軍の将兵にも薦めているともいえる。この地図は私が慰安婦の調査に携わってから15年にして初めて目にした、慰安所を明記した大型の日本製地図であり、非常に価値のあるものだった。私はただちにこの地図を拡大影印して資料館の壁面に掲げた。

七、保存が求められる大一サロン

東宝興路の家屋は日本が投降した後、国与とされ国民党軍事部門に徴用された。1949年5月に上海が解放されると、これらの家屋は徴用を解かれて解放軍3516工場の幹部労働者たちに賃貸された。

2007年の時点で、数字を上げれば合せて53戸、265人が三棟の二階建ての建物に住んだ。たとえ陽光が燦々と降り注ぐような日でも、建物の各部屋はそれほど光がとおらず、昼日中に入っていくにも灯りが必要だった。木造の階段を踏みしめるとギシギシと響き、廊下を歩くとふんわりと柔らかくて少し墜ちていくような感覚があったという。125弄1号の十数戸の人家は合せて三個の便所を共用していた。洗濯した衣服は水の滴るまま狭い通路に干すしかなく、結局、油煙とともに蒸発するにまかせるのだ。階下の昇り口にある電線は錯綜してまるで蜘蛛の巣のようで、ひとたび雨が降ると、雨水がしみ込んでパチパチと火花がでた。2005年にここで一度火災が発生しているが、原因は電線の老化によって階段から出火したことによる。私たちの身分が分かるといつも住民たちは私たちを取り囲むようにして訴える。「あなたは私たちのために伝えてほしい。ここは実際、本当に暮らしにくいのだ。私たちだって保存しなければいけないとは分かっている。ただもう少し安心させてほしいのだ」。そのように訴えられながら、私も一人の歴史調査員としてできるだけ慰めてあげるほかには方法を見つけられそうにないのである。

2007年4月9日、「新聞晨报」に「日本の右翼に反駁する証拠：日本軍慰安所大一サロン跡保存される」と題する記事が載った。その内容の中心は私たちの「中国慰安婦研究センター」と上海市人民代表、それに上海市政治協商委員が呼びかけた「大一サロン跡」を保存する提案が関係する部門によって高度に重視されたというものだった。上海市文物管理委員会などの部門は大一サロン旧跡について専門的に研究をして、東宝興路125弄1号、2号、3号、および東宝興路10号の四棟の建物は20世紀30年代前半に建設された早期の建築物であり、中国を侵略した日本軍が慰安所として使用した大一サロンであると認定した。この建築群は文物保存単位や上海市優秀歴史建築に含めることは難しいものの、中国を侵略した日本軍の重要な罪証であり、日本の右翼勢力の妄言に反論する証拠であることを考慮して保存が相当であるとした。上海市文物管理委員会などの部門は具体的な保存措置を検討し、あわせて処理の状況を国家の関係部門に報告した。

東宝興路125弄の保存をめぐる議論は何年も続くことになった。これ以降、欧米や日本などから多くの学者、専門家が大一サロン旧跡の参観に訪れ、ここに日本慰安婦制度の罪証陳列館を建てようという提案されたこともある。五年あまり後に大一サロン旧跡は保存されることにはなったが、しかしこれからどのように利用していくのかについて、いまだに有力な案はない。2009年に「東方早報」の記者が私にインタビューして、慰安婦問題の特集をおこなった。私も短い文章を書いて、大一サロン遺跡にかんして早期に実効性のある保護措置をとることを呼びかけた。記者のインタビューを受けた際に私は「ここ何年か各地で少なからぬ慰安所遺跡が壊されています。人々が歴史を振り返るよすががなくなってしまうたら、私たちは将来何をよりどころにしてこの時代の歴史を回想し記念したらよいのでしょうか」と強調してみたが、言葉の端には如何ともしがた

いという思いが滲んでいたであろう。

「保存」という意味はつまるところ保存するだけであって、別に実効性のある保護措置がとられるということではない。中国で初めての慰安婦記念館をつくり、かつ住民たちの安全安心を確保するには政府と企業などがきちんと決断し知恵をだして努力する必要がある。東宝興路125弄の住民たちは今では老若男女を問わず大一サロンについて語るができる。記者や参観者にむかって説明することはもうお手のものである。説明する住民にしてみればどうしても多少迷惑だという感情もともないはするが、しかしそれにもまして遺跡保存への理解と熱意をもっており、さらに「いつこの危険な建物から引っ越せるのだろうか」という焦りがある。

近代以降の世界歴史からみると、日本が実施した慰安婦制度はファシストの侵略の重要な一部分を構成しており、日本軍の軍事的な奴隷制度はドイツのユダヤ人虐殺による民族絶滅と同様、第二次世界大戦における最も典型的なファシスト的、反人類的な戦争犯罪である。そしてアウシュヴィッツのラーゲリのような戦争による受難の地は早くから文化遺産となって世界に警鐘を鳴らしている。中国は日本が推進した軍事的な奴隷制度の主要な被害国であり、現在はずでに雲南省龍陵の董家溝慰安所遺跡陳列館と黒龍江省孫呉の関東軍軍人会館陳列館を建設している。私は専門家として現場に立ち会って、この二つの陳列館の設計と陳列にかかわった。

東宝興路の大一サロンも世界で最初の日本軍慰安所遺跡として当然速やかに保護措置をとらねばならない。世界で最初の慰安所であるので、五棟の家屋は完全に整備し、慰安所のレリーフ、襖なども保存する。ここには中国慰安婦記念館を設立するために必要な証拠が揃っており、さらに条件が成熟すれば警鐘を鳴らす意味で世界文化遺産を申請する理由があると考えられる。

大一サロン慰安所遺跡を保存し保護することは、人類が戦争と暴力について思考をめぐらせるために有益であり、また日本社会が戦争の罪行を反省する鏡として警告することもできる。日本政府は1991年に12月に第二次世界大戦中の日本軍と関係する慰安婦問題の調査を行い、1993年8月4日に当時の内閣官房長官・河野洋平氏は調査結果を公表して談話を発表した。「河野談話」は次のように指摘する。

「いわゆる従軍慰安婦問題については、政府は、一昨年12月より、調査を進めて来たが、今般その結果がまとまったので発表することにした。」

「今次調査の結果、長期的に、かつ広範な地域にわたって慰安所が設置され、数多くの慰安婦が存在したことが認められた。慰安所は、当時の軍側の要請により設営されたものであり、慰安所の設置、管理および慰安婦の移送については、旧日本軍が直接あるいは間接にこれに関与した。慰安婦の募集については、軍の要請を受けた業者主としてこれに当たったが、その場合も、甘言、強圧による等、本人たちの意思に反して集められた事例が数多くあり、更に、官憲等が直接これに加担したこともあったことが明らかになった。また慰安所における生活は強制的な状態の下での痛ましいものであった。」

「なお戦地に移送された慰安婦の出身地については、日本を別とすれば朝鮮半島が大きな比重を占めていたが、当時の朝鮮半島は我が国の統治下にあり、その募集、移送、管理等も甘言、強圧による等、総じて本人たちの意思に反して行われた。」

「いずれにしても、本件は、当時の軍の関与の下に、多数の女性の名誉と尊厳を深く傷つけた問題である。政府は、この機会に改めて、その出身地のいかに問わず、いわゆる従軍慰安婦と

して多数の苦痛を経験され、心身にわたり癒しがたい傷を負われたすべての方々に対し心からお詫びと反省の気持ちを申し上げます。また、そのような気持ちを我が国としてどのように表すかということについては、有識者の御意見なども徴しつつ、今後とも、真剣に検討すべきものと考えらる。」

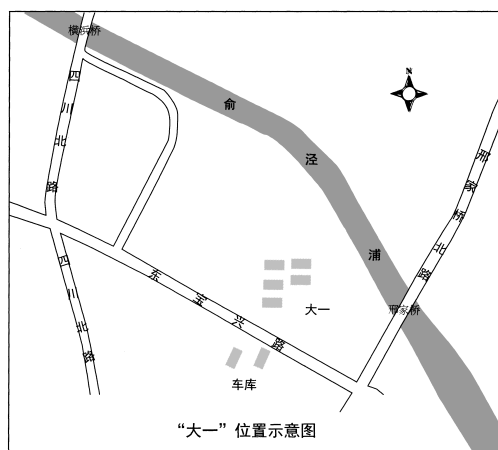
「我々はこのような歴史的な事実を回避することなく、むしろこれを歴史の教訓として直視していきたい。われわれは、歴史研究、歴史教育を通じて、このような問題を永く記憶にとどめ、同じ過ちを決して繰り返さないという固い決意を改めて表明する。」

「なお、本問題をめぐって本邦において訴訟が提起されており、また国際的にも関心が寄せられており、政府としても、今後とも、民間の研究を含め、十分な関心を払って参りたい。」

この談話は、主要には朝鮮半島で強制連行された慰安婦を認めたものであり、中国の被害者は無視されているが、しかしつまるどころある程度は慰安婦に強いた罪を認めた。遺憾なことにはその後も日本の政府高官がたびたび「河野談話」を否定していることである。たとえば2012年8月27日、国会予算委員会において野田佳彦首相ら閣僚は日本軍の慰安婦の存在を否定して、日本軍が慰安婦を強制的に徴発したことを直接証明しうる証拠はないと述べた。2013年はじめに安倍晋三首相はさらに「河野談話」を改める立場を表明した。ただアジア各国の反対の姿勢が固いことに加えてアメリカの警戒があるために、安倍首相の思惑はいまだに実現していない。しかしこの事実が示していることは、日本には慰安婦という戦争犯罪を否認する政治勢力がまだ大きく存在することである。また同様に南京大虐殺、細菌戦、毒ガス戦と強制連行・強制労働などの問題についても、日本人の「集団記憶喪失」はますますひどくなっているようだ。各国の人々の寛容と信頼を得るためには日本政府は真心から深刻に反省する必要がある。

人類が再び過去の過ちを繰り返さないために、人類の平和のために私たちは大一サロン慰安所施設を保存する必要がある。

(注) 「大一サロン」所在図



「大一サロン」は上海市虹口区東宝路125.123弄に所在した。`弄`、は比較的広い通につうずる小路あるいは路地の意である。